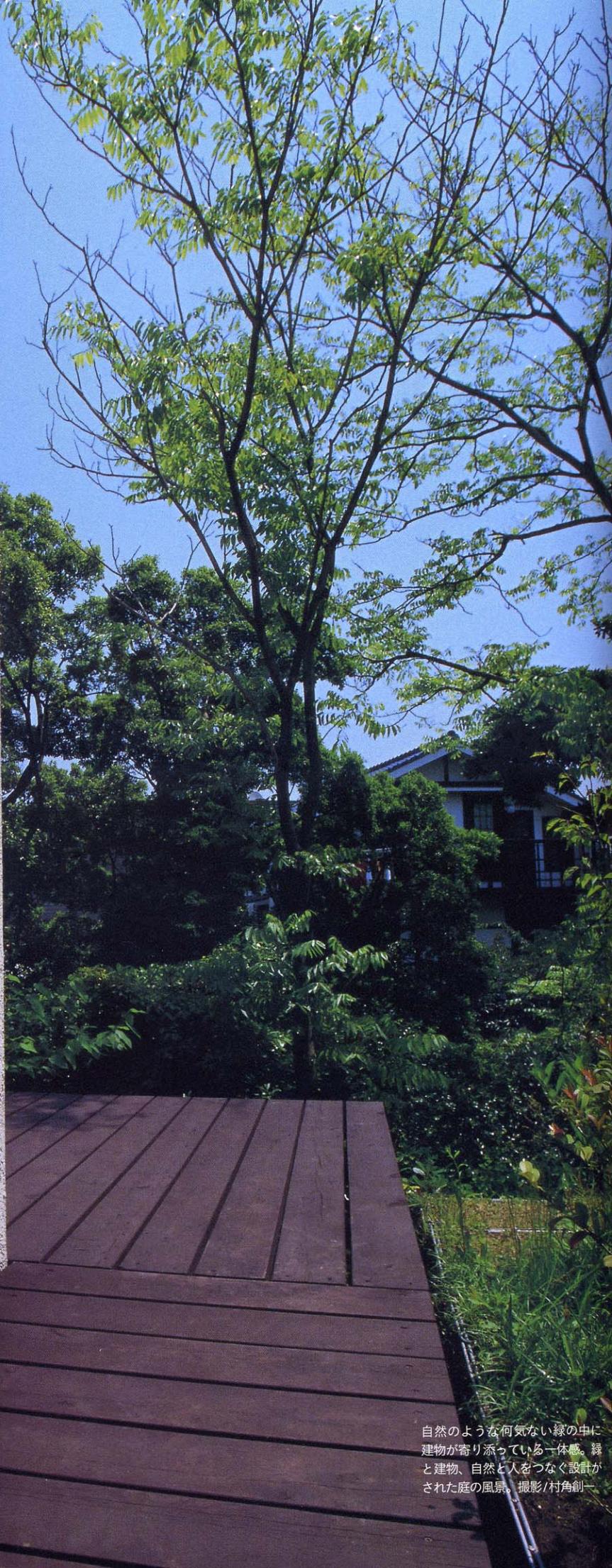


特集

庭のめぐみ

都市の中のほんの狭い土地や人工地盤であっても、それが「庭」になると、そこに触れるひとたちの気持ちほんと潤います。庭は、四季を伝え、室内的気候を調整し、暮らしに楽しみと変化を与えてくれます。それは、ひとつと自然、家と大自然をつなぐ役目をもつということです。建築は庭によって、その土地に根付くことができるのかもしれません。単に見栄えのよい縁があればいい、そういうのではなく、広い視野のもとに、庭を捉えてみませんか。



自然のような何気ない縁の中に建物が寄り添っている一体感。縁と建物、自然と人をつなぐ設計がされた庭の風景。撮影/村角創一

里山の庭をつくる

里山とは、ひとが住む場所に近く、暮らしおよび深く関わってきた山のこと。

そこにはゴナラ、クヌギ、エゴノキ、ヤマザクラ、アラカシ、イタシグなど、さまざまな樹種の雑木が生えており、

薪や炭、堆肥、山菜やキノコ、木の実、家や道具の素材、

そのほか暮らしに必要な原料を得る場として、

ひとが手入れをしながら、再生され続けてきた。

戦後エネルギーが石炭や石油、電気やガスに代わり、

化学肥料やプラスチック製品が普及して、里山は切り開かれて住宅地となり、あるいは放置されるようになってしまった。

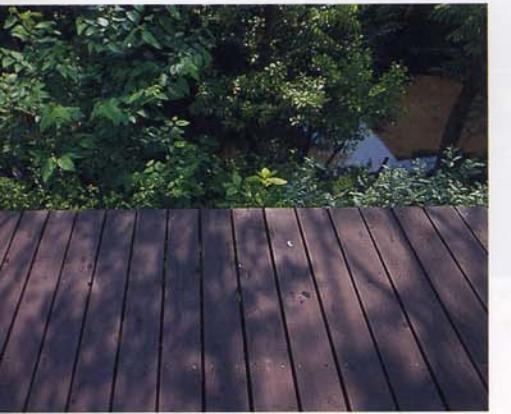
そんな、遠い存在となってしまった里山の植生、考え方を

少しでも庭にとりいれようとする、庭のつくり手たちがいる。

それぞれに個性的な枝ぶりや葉、四季折々の変化、それらは

大きな自然とつながる「現代の庭」として、新鮮な姿を見せてくれる。

デッキから落葉樹と常緑樹が混植された斜面の庭を眺める。つくられているが、自然の中にいるような開放感。緑と光と水面を渡る風が心地よい。鎌倉・Yawn House。撮影/村角創一



上/2階のプライベートスペースには跳ね上げ式の障子をつけています。リビングの開口部を通して、デッキや川に続く緑の景観を楽しめる仕掛け。庭と居室内との幸福な関係のひとつである。中/右ページデッキ側から建物を見上げる。リビングルームの大きな窓がスクリーンのように青空と斜面の木々を映し込む。下/デッキから見下ろした斜面の植栽。すぐ下を流れる川は河口に近い。斜面の上にはりだした柵のないウッドデッキが、庭と居住スペースをつなぐ場。端に腰掛けると斜面の木々や花が足許まで茂り、土や水の匂いもじかに感じ取れる。

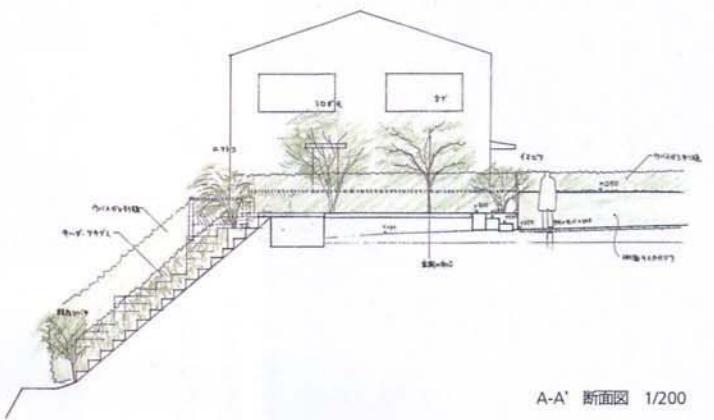
天気のいい日は、リビングルームの開口部をフルオープンにしてテーブルを引き出し、広いデッキで緑に親しむ。テーブルや椅子は小泉誠さんがデザインした。

その土地らしい緑、 住まう人らしい緑

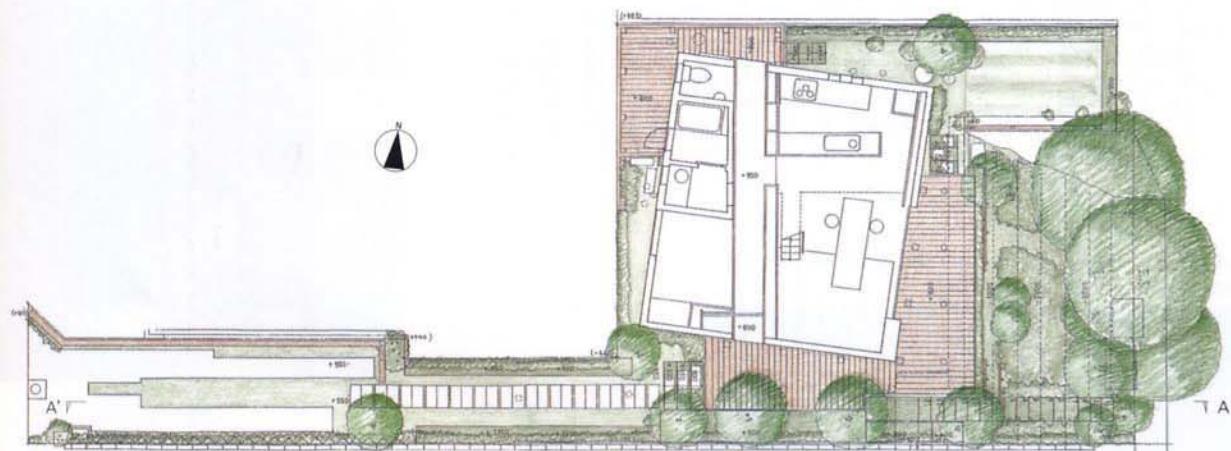
田瀬理夫(プランタゴ)

取材・文 秋川ゆか 撮影 村角創一

里山の
庭をつくる



A-A' 断面図 1/200



平面図 1/200



上/庭の一角には1坪ほどの菜園もある。黒土と堆肥を入れた土はハーブや野菜もよく育つ。斜面の細竹を刈ってインゲンやトマトの支柱として使う。水やりには雨水タンクに溜めた水を活用。左/庭の木々には、夫人が手入れのあいまに少しづつ手書きのラベルをつけています。もともと植物が好きなだけに、知らなかった花や木の名前を覚えていくのが楽しいとか。訪れる人にも好評。

上/右から道路から続く通路、建物を抜けて斜面への階段を切り取った断面図。玄関やデッキなど立ち止まつたときの視線を意識して樹木が配されている。下/平面図外構部スケッチ。建物をつくる建築家と植物を扱う造園家との密なやりとりがあったからこそ、植物にも土地にも人も無理がなく心地よい、そんなプランが実現した。



屋上には周囲を見渡す小さなテラスもある。鎌倉は落葉樹と常緑樹が混在する緑豊かな土地。Tさん夫妻の故郷・瀬戸内の風景にどこか似ているという。



斜面の左端に配した階段は、5×緑ユニットだけで構成されている。地表の植生を傷つけないよう、吊り階段状に組み合わせて地面に乗せているだけ。草を踏みしめて歩くのが気持ちいい。

いかないとつまらないし、逆に建物内にいるからどういう景色を見せたいかも重要。今は借景できる景観がどんどん少なくなっているから、いかに「遮景」しながら景色をつくるかが求められます。大

切なのは建築物と緑との融合です」
内から外への視線に配慮のない建物に合わせて植栽するのは無理が出る。暮らす人の動線や日々の楽しみ方に即し、建物の内からも外からも気持ちよさを感じ

る造園設計が重要」との考え方だ。
そしてもうひとつ、田瀬さんが大切にしていることがある。「植物は、その地域に基本的にあるもの、あったであろうものを使います」

鎌倉駅から材木座海岸方向へと歩く。広い街路は休日ともなれば多くの人出で賑わうのだが、脇道に一步踏み込めば、そこは意外なほどに緑の濃い住宅地だ。家並みの間を縫つて海へ注ぐ、小さな川も流れている。

川辺の旗竿地に立つYawn Houseは、ごくシンプルな外観の白い家だ。アプローチの両サイドは草木や野花でおわれ、奥へと導くように緑が続く。正面に見える木々の清しさに誘われてついいつい玄関をやり過ごした先には、LDKに面した広いウッドデッキがある。

「玄関を素通りして、デッキから入るお客様は多いんですよ」施主のTさんが笑つて言う。人は、無意識のうちに緑や水に引き付けられるもののかもしれない。Tさん夫妻がこの土地を選んだ決め手も、川と木々と海の存在だったそうだ。

デッキの下は川へ降りる斜面。コンパクトな雑木林を思わせる木々の間から水面が見える。植物の密生する地面には、ナデシコやアカツメクサが花を咲かせ、ヤマグワやイチジククリ、ビワなど実をつけける木も少しずつ伸びはじめている。

Yawn Houseは、植栽プランを造園家の田瀬理夫さん、住宅設計を家具デザイナーの小泉誠さんが行なった。庭と建物の関係については設計段階から多くのやりとりを繰り返し、密接な協調のもとにプランづくりを進めていった。

田瀬さんは言う。「建物もランドスケープの一部になつて

約100種もの木々、草花
去年より今年と、庭はすくすく育っていく

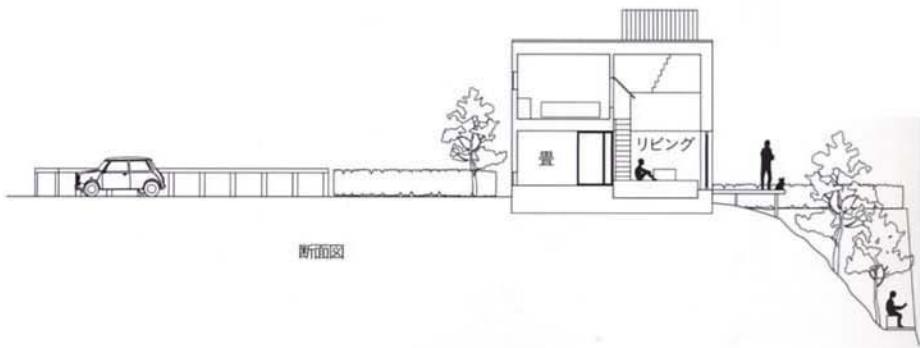


庭のあちらこちらで活用されている5×緑ユニット。フトンカゴと呼ぶ金網コンテナの、上面や側面からさまざまな在来植物が育ち、立体的な緑の景観をつくっていく。



右/建物の白とデッキの茶、植栽の緑との対比が美しい。ぽんと置かれた白い水鉢も建物と庭の風景をつなぐさりげない存在。左/川べりのテラスから見上げるYawn House。土砂崩れから斜面を守ってくれた樹木は、護岸のために伐採の危機にも直面したが、田瀬さんやTさん夫妻、近隣の人々の声で生き残った。

DATA
Yawn House (T邸)
所在地/神奈川県鎌倉市
家族構成/夫婦
敷地面積/186.39m²
建築面積/47.52m²
庭面積/約100m²
住宅竣工/2005年
庭竣工/2005年
造園設計/田瀬理夫 (プランタゴ)
協力/小橋浩子 (アネックス)
造園施工/アネックス5×緑事業部
Team5×緑: 小岩金網
グリーンスタッフ
大木農場
矢澤ナーセリー
住宅設計/小泉誠



断面図

鎌倉周辺は、今ではかなり減ったものの、ウバメガシやタモ、シャリンバイなどの常緑樹が多い土地だったそうだ。Yawn Houseの庭には、多くの「土地の木」が取り入れられた。

実は設計段階当时、アシシメントがあつた。敷地の一角の、大谷石で護岸してあった斜面が、大雨で土砂崩れを起こしたのだ。ところがシロダモやヤブツバキ、エノキなどが茂っていた部分は無事だったという。土深く根を張る植物の力は偉大だ。土地を守ってくれたこれらの木々はできるだけ斜面に残して、景観の一部として生かすことになった。

数多くの植物を密に混植することも、田瀬さんならではのやり方だ。地表を覆うのは「アゼターフ」、堀や階段を形成するのは「5×緑」と呼ぶ。いずれも田瀬さんが考案した緑化システム。アゼターフとは、田の畦道に見られたような日本在来種の多様なタネが仕込まれて生産された植生マット、5×緑は金網製のコントainerに軽量土壤を入れ、アゼターフや樹木苗を植え込んだものだ。庭に設置するやがて、季節ごとにさまざまな植物が芽吹き、花を咲かせていく。

鎌倉周辺は、今ではかなり減ったものの、ウバメガシやタモ、シャリンバイなどの常緑樹が多い土地だったそうだ。Yawn Houseの庭には、多くの「土地の木」が取り入れられた。

実は設計段階当时、アシシメントがあつた。敷地の一角の、大谷石で護岸してあった斜面が、大雨で土砂崩れを起こしたのだ。ところがシロダモやヤブツバキ、エノキなどが茂っていた部分は無事だったという。土深く根を張る植物の力は偉大だ。土地を守ってくれたこれらの木々はできるだけ斜面に残して、景観の一部として生かすことになった。

数多くの植物を密に混植することも、田瀬さんならではのやり方だ。地表を覆うのは「アゼターフ」、堀や階段を形成するのは「5×緑」と呼ぶ。いずれも田瀬さんが考案した緑化システム。アゼターフとは、田の畦道に見られたような日本在来種の多様なタネが仕込まれて生産された植生マット、5×緑は金網製のコントainerに軽量土壤を入れ、アゼターフや樹木苗を植え込んだものだ。庭に設置するやがて、季節ごとにさまざまな植物が芽吹き、花を咲かせていく。

鎌倉周辺は、今ではかなり減ったものの、ウバメガシやタモ、シャリンバイなどの常緑樹が多い土地だったそうだ。Yawn Houseの庭には、多くの「土地の木」が取り入れられた。

実は設計段階当时、アシシメントがあつた。敷地の一角の、大谷石で護岸してあった斜面が、大雨で土砂崩れを起こしたのだ。ところがシロダモやヤブツバキ、エノキなどが茂っていた部分は無事だったという。土深く根を張る植物の力は偉大だ。土地を守ってくれたこれらの木々はできるだけ斜面に残して、景観の一部として生かすことになった。

数多くの植物を密に混植することも、田瀬さんならではのやり方だ。地表を覆うのは「アゼターフ」、堀や階段を形成するのは「5×緑」と呼ぶ。いずれも田瀬さんが考案した緑化システム。アゼターフとは、田の畦道に見られたような日本在来種の多様なタネが仕込まれて生産された植生マット、5×緑は金網製のコントainerに軽量土壤を入れ、アゼターフや樹木苗を植え込んだものだ。庭に設置するやがて、季節ごとにさまざまな植物が芽吹き、花を咲かせていく。

**意識を外に向けると
建物も緑もランドスケープにとけ込む**

「気がつくとキヨウやヤブカンゾウやギボウシも出てきて。春から秋までいつも何か咲いてるんです」とTさん。

木々や草花、野草など、この庭の植物は100種を超える。やがていくばくかの淘汰を経て環境に合うものが残り、庭にその土地ならではのなつかしい里山の景観をつくっていく。

設計を担当した小泉さんは、「人工物と植栽を無理につなげるのではなく、際をどうおさめるかが大切なんです。自然のままに見えることは一番難しいはず。初期段階から組んでキャッチボールできたのがよかったです」と話す。

2階にいても開口部を通じて、庭の緑はすんなりと視界に入る。

「屋内も庭も、いろんなところにあくび（yawn）したくなるような気持ちのいい居場所がつくれました」

5×緑の階段を踏み、川まで降りてみた。土と草の感触が足に心地よい。木々の間を歩く小さな散歩道もある。落葉の上をアリやテントウムシが歩き、樹上にリスやコゲラ。川面には白鷺が遊ぶ。豊かな生態系を得て、この庭はこれからもきっと、少しずつ変化を続けていく。

アプローチから5×緑ユニットの階段を上ると、ごくさりげなく配された玄関口の前から、川の方向に向けてウッドデッキが続く。緑の連続性とミニマムな建築物とが一体感を醸し出す。



上/道路から奥まったところにあるYawn House (奥左)。入口には隣家の松を借景として映えるように、シラウメを植えた。アプローチ左右には5×緑をベースにした生垣が続く。旗竿地でこそ楽しめます。下/玄関から廊下を見通す。廊下はほぼ正方形の住まいを斜めに通っている。床に仕込んだ照明の先には、夫人が選んだオオヤマレンゲの鉢が見える。視線と緑がほどよく絡まり合う。